

外国人医師と私の契約結婚

E m a & A z u s a

華藤りえ

Rie Kato

ernity



エタニティ文庫

目次

外国人医師と私の契約結婚

5

書き下ろし番外編
夜ごと、妻を愛すと誓う

309

外国人医師と私の契約結婚

1 いきなり婚約成立ってありですか？

金曜日の朝。大学の医学部キャンパスはいつもより騒がしい。

というのも、休み前に診察してもらおうと訪れる患者や、退院準備をする患者の家族が、敷地内中心部にある大病院の周辺に増えるからだ。

そんな人の多い通りから一本奥に入った道を、結崎絵麻は足早に歩いていた。

春休みで学生がいらないため、基礎研究棟や事務棟へ向かうこの道は、人もまばらだ。

水色のシンプルなブラウスに、紺色の膝丈プリーツスカート。その上からオフホワイトの春用トレンチコートを着た絵麻は、仕事の段取りを考えつつ、大きめのシヨルダーバッグを肩にかけ直す。

医学部の研究室で、教授秘書兼事務員として働く絵麻の一日は、それなりに忙しい。

今日は、出張していた助手さん達が午後に戻ってくるんだっけ。それまでに、海外駐在研究員の経費精算をして、それから……)

絵麻はほころび始めた桜に目もくれず、頭の中で今日のうちに片づけるべき仕事を

ピックアップしていく。しかし、考え事に集中しすぎて、古びた研究棟の扉の前で、人とぶつかりそうになってしまった。

「きゃっ、ごめんなさ……」

「おっと。おはよう、絵麻ちゃん。ちゃんと前を見て歩かないと危ないよ？」

喉を鳴らして笑う男性の声には聞き覚えがあった。顔を上げると、絵麻と同じ研究室に所属する男性医師が目を細めてこちらを見下ろしている。

(うわ、朝から大迫先生……まいったなあ)

「おはようございます、大迫先生。今日は早いんですね？」

引きつりそうな顔に笑みを浮かべて取り繕う。

「まあね。いつもより早起きしてきてラッキーだったな。朝から君の顔を見られて嬉しいよ」

そう言って、大迫は絵麻の肩を抱かんばかりに近づいてきた。

(こっちは、大迫さんと会わないように、わざと出勤時刻を早くしたんですけど)

臨床医である大迫は、博士号を取るために、絵麻の叔父が教授を務める亜熱帯性ウイルス免疫学研究室に所属している。

出会った時からやたらと馴れ馴れしく接してくる彼が、絵麻は苦手だった。

そうでなくても、中学から大学まで女子校に通っていたため、異性に対する免疫は極

端に少ない。

二十四歳になった今でも、彼氏はおろか、デートの経験すらないのだ。

できればもう少し、大迫とは距離を取りたかった。だが、絵麻のスキルでは、大迫のように遠慮のないタイプを上手くあしらうことなどできるはずもなく、いつも相手のペースに巻き込まれてしまう。

「そういえば、この間言っていた教授の持っている医学専門書。あれ、僕の論文に必要なんだ。よかつたら今日、絵麻ちゃんが帰る時に一緒に取りに行っても構わないかな？」

他意のない調子で告げられ、絵麻は心の内で頭を抱える。

早くに両親を亡くした絵麻は、教授である叔父に引き取られ、祖父母の住む家で一緒に暮らしていた。

といっても、祖父母はすでに亡くなっているので、今は叔父と二人暮らしである。

しかし忙しい叔父は睡眠をとるために帰宅するようなもので、家にはほとんど絵麻一人だけ。そこに同じ研究室の人間とはいえ、男性を招き入れるのには抵抗がある。

（困る。……本当に困る！ でも、論文に必要だって言われたら断れない……）

飾り気のない、後ろでまとめただけの真つ直ぐな黒髪を、指で撫でながら逃げ道を探す。

「……で、何時にする？」

大迫が答えを催促するみたいに、身を屈めて顔を覗き込んできた。

やけに近い距離感に、しかめ面になる。

絵麻からすれば、大迫は叔父の研究室の一員で、秘書兼事務員としてサポートすべき研究者の一人という認識しかない。けれど大迫は、こちらが強く出られないのをいいことに、周囲に誤解を招くような言動を平気でしてくるのだ。

無神経というか、確信犯というか……できれば、あまり近付きたくない相手だった。

その時、背後から冷たい声で名前を呼ばれた。

「結崎」

不意に、どくと絵麻の心臓が跳ねる。

振り向くと、背の高い男性が不機嫌そうに絵麻を見ていた。

琥珀色の肌と蜂蜜色の髪。日本人よりずっと彫りが深く鼻筋の通った顔立ちは、どことなく品のよさを感じさせる。

叔父である結崎武彦教授の片腕で、この医学部キャンパスでも有名な、外国人医師。亜熱帯性ウイルス免疫学教室准教授のアズサ・サウダッド・ハリーフアだ。

「教授室に来客だ。遊んでいる暇があるのなら、すぐに対応してもらいたい」

簡潔にそれだけ伝え、彼は、絵麻達の横を通り過ぎ研究棟へ入っていく。

「は、はい。わかりました！」

絵麻はまだ会話を続けようとする大迫に頭を下げて、シオルダーバッグを抱え直しな

がらアズサのあとを追いかけた。

研究室に着くと、絵麻はさっそくお茶の準備を始めた。

研究員や学生用の安い特売茶ではなく、冷凍庫で保管していた頂き物の玉露を給湯室で解凍する。そして湯冷まししたお湯を急須に入れて二分ほど待ち、温めていた湯飲みに注ぐ。

ここに来る間に、アズサから聞いた人数分の湯飲みをお盆に載せて教授室へ入ると、三人の男性が応接セットのソファに座っていた。

小太りの身体に、くたびれた白衣を着た五十代の男性は、教授で叔父の結崎武彦。

来客席には、仕立てのよさそうな三つ揃いのスーツを着こなし、黒髪を後ろに撫でつけた若い男が座っている。

そして、なぜかアズサが来客の隣に腰かけていた。目を閉じ腕を組んで座っているアズサを見て、絵麻は内心首を傾げた。

お茶を置いた瞬間、アズサがうつすらとまぶたを開く。途端に絵麻の鼓動が騒がしくなる。

金色の光彩を持つ瑠璃色の瞳——美しい宝石のような彼の目が、お茶を置く絵麻の指先を見ていた。

アズサ・サウダッド・ハリーフア。

東南アジアに浮かぶ島国・ルクシャーナ王国人の父と、日本人の母を持つ彼は、絵麻が心惹かれている男性でもある。

おずおずと顔を上げると、あからさまに彼が顔を逸らした。

(どうして、ここまで嫌われちゃったんだろう。……わけがわかんない)

落ち込む気持ちを抑えつつ、秘書の顔で退出しようとした時だった。黙り込んでいた男達の中から叔父が声を上げる。

「絵麻。ちよつと、ここに座りなさい」

座っているソファの横をぼんぼんと叩かれて、絵麻は戸惑う。

いかに叔父の研究室の秘書兼事務係とはいえ、お客様と同席するのはいかなものか。考え込んでみると、いいから、と促されて、絵麻はためらいながら叔父の横に座った。

「こちらは、外務省でルクシャーナ王国との渉外を担当している芳賀遼くんだ」

「はあ」

渉外担当——つまり外交官がここにいる理由がわからず、絵麻はつい間の抜けた声を出してしまふ。

医学部の研究室は留学生も多く、ビザ変更の手続きや留学生の居住地変更の書類を揃えるのは、事務の仕事だ。

しかしそれらに関わるのは入国管理局であって、外交官とは関係がないと思っていたのだが。

「ええと……私、なにか間違った書類を外務省に出したりしましたか？」

「いや、そういうことじゃないよ。絵麻」

武彦が苦笑を浮かべて、絵麻の言葉を否定する。

だとしたら、いったいなんの理由があって自分はこの場に同席しているのだろうか。疑問に思つて視線を向けた絵麻に、叔父はなにかをためらうように口ごもる。

その様子を、場にそぐわないニヤニヤした顔で見ていた芳賀が、代わりに口を開いた。

「実は、アズサが……ああ、ハリーファ准教授が婚約することになった」

「え……？」

——一瞬、頭の中が真っ白になる。いつかこの日が来ると覚悟していたはずなのに。

「そ、それは、おめでとうございます……」

二十九歳にして医学部の准教授。しかも世界的な学術誌に論文が何度も載るほど優秀な人だ。素晴らしく整った外見もあって、彼に好意を寄せる女性は多い。

ストイックに研究に打ち込んでいる彼に、特定の女性がいたのには驚いたが、寡黙で誠実な彼のことだ。簡単に決断したことではないだろう。

もともと、叶わない恋だとわかっていた。

側において彼を見ていただけでいいと思っていた。

だから、ここで自分がショックを受けるのは間違っている。

泣きたい気持ちをぐっと呑み込み、絵麻は顔を上げて芳賀とアズサに視線を向けた。

「では、結婚に向けての書類手続きなどに関するところで、私は同席していると解釈してよろしいのでしょうか？」

福利厚生や今後の休暇計画についての相談なら、スケジュール管理も仕事の内とする絵麻が呼ばれた理由も納得できる。

アズサへの恋心を必死に押し隠し、これからの仕事に気持ちを集中させた。すると、それまでずっと目を逸らしていたアズサが長い溜息をついて、絵麻に視線を合わせてきた。

「最後まで話を聞け。……俺が婚約するのは他でもない、君だ。結崎絵麻」

正面からそう断言され、絵麻の思考が停止する。

「……え？」

「俺が婚約するのは、君だ。結崎絵麻」

一言ずつゆっくりと区切りながら、再び告げられた言葉に、絵麻は目を大きく見開く。

「ほあつ……ッ？」

——絵麻の人生で最高に素っ頓狂とんきやうな声が喉のどから飛びだし、教授室に大きく響いた。

2 同棲と偽婚約者の距離感

「どういうこと、ですか」

引きつりそうになる喉を手で押さえ、絵麻はできるだけ冷静に問いかける。

だが、いきなり爆弾発言をしたアズサは、腕を組んで黙り込んだまま、絵麻を見つめるだけだ。

教授室に、気まずい時間ばかりが流れていく。

——どうして？ 彼は私を嫌っているんじゃないやなかったの？

まったくわけがわからない。わかれないというほうが無茶である。

なぜなら、アズサが絵麻を嫌っているだろうことは周知の事実だからだ。

例えば、研究室のメンバーでランチに行くことになっても、絵麻がいる時は必ず、「急用ができた」と言って姿を消す。アズサが雑談している談話室に絵麻が入っていくと、会話を打ち切って実験に戻ってしまう……など。

仕事以外で二人が会話することはなく、その会話も必要最低限で切り上げられる。

最初は偶然かと思っていたが、何度も重なるうちに、彼から避けられていることを自

覚した。

そう思ったのは絵麻だけでなく、周囲も同じように『アズサは絵麻を避けている』あるいは『嫌っている』という認識を持つようになった。

そこまではっきり自分を嫌っている相手から、「婚約したい」でも「婚約してほしい」でもなく、「婚約する」と断言された絵麻は、困惑するしかない。

どれほどの時間がたったのか。黙って成り行きを見守っていた外交官の芳賀が、大げさに肩をすくめた。

「これじゃあ、いつまでたつても話が進みそうにないな。ここからは俺が引き取る」

芳賀が宣言すると、アズサは再び絵麻から視線を外してしまった。

そんなアズサを気にした様子もなく、芳賀は人差し指を回して少し考えるような仕草を見せる。

「……さて、どこから話そうかな」

額ひたいに落ちてきた黒髪を吐息で吹き飛ばし、芳賀が絵麻のほうを見た。

「まずは、ここでおま行っている研究についてだ。もちろん理解しているよな？」

馬鹿にするような声音に、思わず眉をひそめて絵麻はうなずく。

「ルクシャーナ王国に昔から存在する風土病——ガムザ病が人体に及ぼす影響と、免疫機能の研究。そして、病の原因であるウイルスの解析です。また、薬学部や分子生物学

教室、製薬会社との産学連携による新薬開発も同時に進めています」

この研究室に在籍する教授秘書として当然の説明をしてみせると、芳賀がパンパンと手を叩いて絵麻を評価する。

「正解。——ではザムザ病については？」

その瞬間、絵麻は表情が強張るのを感じた。まるで絵麻の知識を疑い、確認してくるような言動に怒りを覚える。だが、芳賀は叔父の客で、これは秘書の仕事だと自分に言い聞かせ、個人的な感情をぐっと堪えてうなずく。

「ザムザ病は、発熱や発疹など、症状は『はしか』に似ていますが、人体への影響はより強力な病です。ルクシャーナの人々は、大抵子どもの頃に罹患しますが、もともと免疫を持つか、病への耐性があるので数日で回復します。そのため、最近まであまり注目されてきませんでした」

冷静にと思いつつも、抑えたはずの怒りがふつふつと沸き上がってくる。

気持ち落ち着かせるため、一呼吸置いてから、絵麻は再び説明を始めた。

「ですが、近年、成人してからザムザ病に罹ると重症化する傾向が強いとわかり、治療が遅れた場合は死に至ることも多く、特効薬が望まれています」

ザムザ病は、かつて考古学研究でルクシャーナを訪れていた絵麻の父の命を奪った。絵麻の人生を一変させたザムザ病のことを、忘れた日はない。

この病で苦しむ人が一人でも少なくなるように、絵麻のように悲しむ遺族がいなくなるように……。その手助けをしたくて、絵麻は叔父の武彦が教授として、ザムザ病を研究するこの研究室の秘書となったのだ。

そんな絵麻に対して、芳賀は再び手を叩いて、「正解」と笑う。

彼の失礼な態度に、絵麻はいらつき始めていた。

たとえ雑用でも、絵麻なりに努力してザムザ病と向き合ってきたことを、芳賀に馬鹿にされた気がしたからだ。

これ以上ここにいたら、秘書らしからぬ態度を取ってしまいそうだった。

「……お話が進まないようですし、もう失礼してもよろしいですか？」

立ち上がろうとした絵麻の行く手を、白衣に包まれた長い腕が遮る。アズサだ。

彼の制止に驚いて、浮きかけた絵麻の腰が再びソファアに沈む。

「ハーリーファ准教授？」

「つまり……君は、私の研究についても、当然、理解していると考えていいんだな？」

言われたことを理解した瞬間、絵麻の頭に血が上る。芳賀のみならず、同じ研究室にいるアズサにまで、絵麻のこれまでの努力を蔑ろにされた気がした。

「当たり前です！」

思わずきつくなってしまう口調に、アズサが微かに目を見張る。だが、それに気づ

けないほど絵麻は感情的になっていた。

（知らないわけ、ない。……ずっと、見てきたんだもの）

アズサは、母国であるルクシャーナ王国固有の珍しい病を治す手立てを探すため、日本に留学したのだそうだ。そして、ザムザ病を引き起こすザムザウイルスの研究が、世界で一番進んでいた、この亜熱帯性ウイルス免疫学教室に所属した。

なぜなら、アズサもまた、絵麻と同じように肉親——母親をザムザ病で失っていたから。肉親を病で失う悲しみや、その原因をなくしたいという決意が、絵麻には誰よりよくわかる。

だから、嫌われているとわかっているにもかかわらず、つい目で彼を追いかけてしまっていた。

研究室の秘書として、可能な限りの手助けをしてきたつもりだったけれど、彼にしてみれば、研究への理解があるかどうかでさえ、確認を必要とする程度の存在でしかなかったのだ。そんな自分の無力さが悔しい。

今にも溢れそうになる涙を堪え、絵麻は目の前にいる二人の男をじっと見つめる。すると芳賀が、突如として姿勢を正し、真面目な顔をした。

「了解。なら本題に入ろうか。……ご存じの通り、結崎教授やアズサの研究が功を奏し、ザムザ病に対抗する新薬の治験が終わり、承認を待っているところだ」

治験とは、できたばかりの薬が本当に問題がないか、実際に患者や健康な人間に対し

て行うテストだ。

新薬開発としては治験の合格が一つの山場で、新薬として厚生労働省に承認されれば、病に苦しんでいる患者が利用することができる。

「このまま順調にいけば……遅くても一、二年後には新薬として承認されるだろう。だが、ここにきてちょっとやっかいなことが起こった」

「え……」

結崎家とアズサにとって、ザムザ病の対抗薬が完成することには特別な意味がある。

まさか、重大な副作用が見つかって、新薬としての承認が得られなくなったのだろうか……

嫌な考えに絵麻は表情を強張らせた。

「ああ、お嬢ちゃんが考えているようなことじゃない。薬としては問題ない。問題は……ザムザウイルスとアズサに縁のある、ルクシャーナ王国に関することだ」

手を振って絵麻の考えを否定した芳賀が、淡々と説明し始めた。

ルクシャーナ王国は東南アジアにある島国で、観光以外の資源が乏しいと言われてきた国だ。

しかし近年、海底資源の調査や採掘などの技術向上に伴い、ルクシャーナ王国領海に、豊富な海底油田や希少金属資源があることがわかった。それにより、ルクシャーナはに

わかには世界の注目を浴びることとなった。

様々な国の総合商社や資源カンパニーが先を争って国を訪れ、一気に国際化が進んだ。ところが、そんな中、ルクシャーナ王国の王太子、イムランがザムザウイルスに感染し——ザムザ病を発症してしまったという。

ルクシャーナ国王は、王太子に万が一のことがあった場合に備え、急遽、留学中の第二王子を国に呼び戻し、国内の有力貴族の娘と結婚させることを決定した。

「そのルクシャーナ王国の第二王子殿下が、アズサ。正式には、アズサ・サウタッド・ハリーフア・アミル・アルサーニ。お嬢ちゃんの目の前にいる男だ」

「殿……下？」

あまりに途方もない話すぎて、絵麻は理解が追いつかない。

お盆を胸に抱いて、ただ馬鹿みたいに目と口をぼかんと開いてしまう。

(どっ……どこから、どう、突っ込めばいいのか……わか、わからなすぎ、る)

目の前にいる芳賀とアズサに抱えているお盆を投げつけて、頭を抱えてうずくまり、そのまま人事不省に陥りた。

混乱のあまり、そんなことを考えながら、絵麻は喉を鳴らして唾を呑む。

「まあ、いきなりアズサが王子だと言っても信じられないだろう。だから資料を揃えてきた。目を通せ」

まるで自分の部下にするような気安さで、芳賀が脇に置いていたビジネスバッグから書類の束を取り出し、絵麻の前に投げる。

テーブルの上に散らばった書類には、ルクシャーナ王国領事館発行の王室家系図や、公的な印が押された英文の写真付き経歴書が見取れた。

さらに、駄目押しでアズサがポケットから差しだしてきたパスポートを見て、絵麻はこの信じられない現実を受け入れた。

——Diplomatic.

外交旅券——つまり一般人ではなく公人であることが、パスポートの表紙に金で刻印されていた。

秘書兼事務として、様々な手続きをすることはあっても、絵麻は今までアズサのパスポートを見たことはなかった。

緊張に震える指先で中を開くと、アズサの名前の前に、王族であることを示す『H・R・H.』と記してある。

おそらく、研究室に所属する他の医師や院生も知らないだろう。叔父は知っていたのかもしれないが、こんなこと……お忍びで一国の王子が研究員をしていたなんて、他言できるはずもない。

(でも待って？ それならどうして、私と婚約するなんて話になるの?)

「あの、それだったら、ええと、殿下は、帰国して婚約されるということですよね？ ……
その、王様の選んだ女性と」

絵麻以外の男性陣が、同時に溜息をついて、こめかみを押さえたり、気まずそうに窓の外を見たりした。

「留学した時点で、ルクシャーナ王室とは絶縁状態だ。…今更、王族としての役割を果たす気などない。第一に俺は医師以外の生き方を考えていない。この王命に従うくらいなら、結婚…絵麻。君と結婚したほうがまだと計算した」

胸にナイフを刺されたような痛みを覚え、絵麻は息を止めた。

馬鹿にするにもほどがある。望まない結婚をするくらいなら、絵麻としたほうがましだなどと。

同時に、どんなに嫌われているとわかっているにもかかわらず、絵麻はアズサに惹かれており、彼に対する諦められない思いが鼓動を騒がせるのも事実で。

（好きになっても仕方がない、諦めなければならぬ。そう考えていた矢先に、こんな関係を突きつけられるなんて）

絵麻は自分がどうしたのかわからない。

「父…ルクシャーナ国王ジャールフ・サウダット・ハリーフア・アルマリクから、研究者を辞め、即時結婚し、王族として復帰せよと申し渡された時、すでに婚約者がいる

から帰国しないと告げた。だが、こんな話を公にはできない。そこで旧知の芳賀に相談したところ、君が最適だという判断に至った」

淡々と告げるアズサに、絵麻は震える唇を噛みしめた。

「理由くらい、知りたいと思うのはわがままですか？」

きつと肯定的な理由でないだろうことはわかっているのに、尋ねずにはいられない。ほんの少しでもアズサからの好意があつて欲しいと願ってしまう自分が情けない。

「それは…」

絵麻を見たアズサが目を見張り言葉を失う。すぐに彼に代わって芳賀が身を乗り出した。

「その一、ザムザウイルスの研究内容を知っていて、口が堅く信頼のおける人間であること。その二、周囲には本当に婚約したと思わせたい。国王側だって、アズサの発言が、嘘か真実かの調査くらいするだろう。だが、本当に関係を結ばれても困る。その点、お嬢ちゃん…恩師の姪御さんには手を出さないだろうと考えた。その他もろもろ理由はありますが、アンタ以上の適任者はいないと判断したというわけ」

空いた左手で指を折りながら告げられる。それを肯定するように隣で叔父がうなずいた。

「……なに、それ…」

「すまない。絵麻。……けれど、ザムザウイルスの対抗薬が承認されても、その後の医療関係者へのフォローや、学術的な追跡研究にアズサ君の協力は不可欠だ。今、彼にいなくなられるのは辛い」

叔父の武彦は、兄である絵麻の父の死をきっかけに、内科医を辞め、ザムザウイルス研究を始めた。現在ではその研究の第一線で活躍する教授になっている。

叔父として、絵麻を大事に思う気持ちはあっても、その気持ち以上に、医師として、兄の仇であるザムザウイルスの対抗薬を完成させたいという強い思いがあるのだろう。

その気持ちは、絵麻にも痛いほどわかる。だから叔父を責める気にはなれない。「婚約した、ふりをすればいいんです……ね？」

これっぽっちも愛されていないどころか、嫌われ、避けられているのになんという皮肉だろう。

精一杯の虚勢を張って、絵麻はアズサを真っ直ぐに見つめた。

——けれど。

「いや、悪いが、明日にでも同棲してもらおうことになる」

「どっ、同棲——ッ!？」

芳賀に告げられた内容に、すでに限界だった感情が一気に爆発した。

ソファアから立ち上がり、絵麻はただ叫ぶしかできない。あまりの展開についていけ

ず、その場で立ち尽くしていると、駄目押しの一言が加えられる。

「まあ、最悪、便宜的に籍を入れてもらうことになるかもな。つまり契約結婚」

いきなり婚約するという話にも度肝を抜かれたが、結婚の可能性まで告げられては、さすがの絵麻も我慢できない。

「な、な……なんで、私がそこまでしなきゃならないんですか！」

絵麻の意思を完全に無視した芳賀の言葉に、ますます怒りが強くなる。

「お嬢ちゃん、これまでの話、ちゃんと聞いてた？ 一国の王が政略結婚を命令し、それを断ろうとしているんだぞ」

肩をすくめながら、芳賀が鼻で笑う。

「ジャーレフ国王陛下だって馬鹿じゃない。アズサの言う婚約者について、あらゆる手を使って調査確認してくるだろうし、別れさせようとするだろう。なんせ、アズサが王の決定に従わないなら、実力行使するって言ってきてるんだからな」

「そんなの、完全にハリーファ准教授の都合じゃないですか！」

怒りで声のトーンが高くなるのを自覚しつつも、反発せずにはいられない。

いくらなんでも人を馬鹿にしすぎている。愛情があるならまだしも、政治的な都合だけで、同棲や契約結婚を強要されれば、絵麻じゃなくたって怒るに決まっている。

いくらザムザ病の薬を完成させるためと言われても、我慢の限界だった。

「お話はわかりましたが、同棲はお断りします！　まして、けっ……結婚なんて！」
 それまで黙っていたアズサが真つ直ぐ絵麻を睨にらんでくる。その迫力に臆おそしそうになるが、簡単に受け入れていい問題ではない。

「先ほど芳賀が説明したように、父は婚約者が本物かどうか調査確認するだろうし、別れさせようとしてくる。あらゆる手を使ってだ。巻き込む以上、君を守るのは俺の義務であり責任でもある。そのために、同棲は必要な措置だし、便宜上の結婚も辞さない」
 「そんな……」

「別に、頼まれても君に手を出さず気はない。その点は安心していい。結婚も保険のようなものだ」

言葉を失う絵麻に、アズサがとどめを刺す。

（手を出すとか、出さないとかの問題じゃない！）

恋人でもないのに、一つ屋根の下で暮らせと命じられて——都合がいいとか、適任者とか、まるで実験対象みたいに判断されて、挙げ句の果てには結婚が保険だなどと、いくらなんでも傷つく。

まして、アズサに好意を——たとえ一方的であっても——持っているからこそ、絵麻の意思を完全に無視したやり方が許せないと思ってしまう。

心にもやもやと広がっていく黒い雲を、頭を振って払い、毅然きぜんと顔を上げる。

「つまり、ハリーファ准教授は、私を一切女として見ない。手を出さないということですわね？」

自分自身の心を殺して、絵麻はきっぱりとした口調で確認した。

すると彼は一瞬だけ、どこか苦しげに瞳を陰らせ、唇を引き結んだ。が、すぐ、いつもの無表情になる。

「ああ。そうだ」

乾いた笑いがこぼれ出る。今すぐこの場から逃げ出してしまいたかった。

叔父の申し訳なきような顔。絵麻と目を合わせようとしてもしないアズサ。芳賀の皮肉をたたえた意味深な笑み。

それらを順番に見て、決意した。

「わかりました。では、お受けしますので、よろしくお願いいたします。……私は、まだ仕事がありますので、これで失礼させていただきます」

立ち上がり、つとめて平静を装よそおいながら扉の前で頭を下げ、絵麻は男達に背を向ける。こんなに人を馬鹿にした話はない。好きだとか嫌いだとか以前の問題だ。いきなり契約結婚を迫り、断る権利もないなんて。

（ひどい。私をなんだと思ってるの）

教授室を出て、給湯室まで涙を堪こえるのが精一杯だった。



——傷つけてしまった。

絵麻の足音が遠ざかっていくのを聞きながら、アズサ・サウダッド・ハリーファは顔をしかめた。

（ハリーファ准教授は、私を一切女として見ない。手を出さないということですわね？）
あそこまで完璧に拒絶されながらも、偽りの婚約者として絵麻以外考えつかなかった事実が、小さな棘となって胸に刺さる。

国王である父に一方的に結婚を決められ、国に戻るよう命じられた時、思わず婚約者として絵麻の名前を口走ってしまったのは、叶わない恋への未練だろうか。

初めて出会った時の絵麻を思い出し、アズサは唇を噛んだ。

当時の絵麻は、ちょっと人見知りをする、家族思いの高校生だった。

五歳年下で、異性というよりは妹のように感じていた。

実際の妹——異母妹とはほとんど交流がなかったものの、なぜか絵麻には出会った時から近いものを感じていた。

それは、アズサが望んでも手に入らなかった家族の温かさというものを、無意識に彼

女から感じ取っていたのかもしれない。

アズサの母親は日本人で、来日した父王の通訳を務めたのをきっかけに、ルクシャーナ国の第二王妃となった。

一般人が、一夫多妻制の、しかも王族に嫁ぐのは、並大抵の決意ではなかったと思う。事実、母はルクシャーナ王国でとても苦勞していた。

それに耐えられたのは、国王が深く母を愛していたこと、第一王妃が母を迎え入れ、後ろ盾になってくれたことからだろう。

やがて生まれたアズサは、第一王妃の生んだ王太子のイムラーンと共に、王子教育を受けることになった。王の直系男児は、イムラーンとアズサしかいなかったが、母親同士の仲がよかったおかげで、兄弟の関係は良好だった。

けれど母がザムザ病に罹り、治療も虚しく亡くなった時、アズサのすべては一転した。父王は、母——最愛の妃の早すぎる死に、一時は政務も執れぬほど落ち込んだ。その

間、息子のアズサを顧みることは一度としてなかった。

母の死によって、突然、孤独の中に投げ出されたアズサは、徐々に感情というものを失っていく。

そんな彼の状態を心配した第一王妃とイムラーンが、アズサの「王族として生きるよ

り、母を奪った病を研究し、根絶することで国を支えたい」という希望を受け入れ、留学させてくれたのである。

十七歳で、米国の大学理学部を飛び級で卒業したアズサには、そのまま研究者となる道もあったが、日本の医学部に改めて入学し直した。

医師資格を持つていたほうが、今後の人生に役立ち、病で苦しむ人々をより多く助けられると判断したからだ。

そうして、アズサはザムザ病研究の第一人者である、結崎武彦教授の研究室に所属し、必死に勉強と研究を続けた。

そんな時に、アズサは絵麻と出会ったのである。

きっかけは、恩師の結崎武彦教授が階段を踏み外し、こつびどくねんざしたことだ。

当時、まだ大学生ながらも結崎教授の助手兼秘書のようなことをしていたアズサは、一人で歩けない教授を家まで送った。

梅雨のある日だった。

雨に濡れた木の香りと、玄關脇に青い紫陽花あじさいが咲いている昔ながらの日本家屋かおく。

肩を貸している教授に代わって、玄關の引き戸を開けた時――

よく磨みがかれた板張り廊下の先から、無邪気な少女の声が聞こえてきた。

「叔父さん？ 今日早く帰ってこられたんだ。ちようどよかった！ 私ね、おばあちゃ

んから肉じゃがと卵焼きの作り方を教わって、晩ばん………」

明るく語りながら藍染めののれんを潜くぐってきた少女とアズサの視線が合う。

白い半袖の上着に紺色のブリーツスカート。

首元を飾る赤いスカートが印象的なセーラー服の上に、シンプルなエプロンをつけた少女だ。

彼女はアズサを見た途端、頬を朱に染め、唇を半分開いたまま動きを止めた。

様子を見ていた結崎教授が、アズサに肩を支えられたまま苦笑して、少女に声を掛ける。「絵麻。……その、なんとというか」

足を固定するギブスを指で示して説明する結崎教授の言葉を、聞いているのかわからないのか。こちらが恥はずかしくなるほどの純朴さで、少女――絵麻はアズサばかりを見ていた。だがその時、アズサもまた、なぜか絵麻から目を離せずにしたのだ。

そのうち我に返った絵麻が、逃げるように背中を向けた。そして、「おばあちゃあん！」と、声を響かせながら奥に消えていく。

すぐに、少女に代わって老婦人が現れ、一緒に晩ごはんを食べていくことになった。

老婦人とその夫、二人の孫である絵麻。そして教授と共に食卓を囲み、アズサはこれまでになく居心地のよさを感じた。

綺麗な箸遣いはしづきねえ、と褒められながら、少しだけ焦げた甘い卵焼きを口に運ぶ。する

と、食卓の端で小さくなっていった絵麻が、自信なさげにこちらをうかがっているのがついた。

口にしたばかりの卵焼きを褒めると、はにかみつつ彼女が作ったのだと教えてくれた。控えめに浮かぶ笑みが強く印象に残った。

あの日のことが、今も昨日のこのように思い出される。

教授の母親である結崎家の老婦人に気に入られ、アズサは頻繁に食事に誘われるようになり、絵麻と仲よくなるのにも時間はかからなかった。

彼女も父親をサムザ病で亡くしたことを知っては、アズサの中で絵麻への共感が一気に増し、大切な家族とはこういう存在のことを言うのだろうか、考えるまでになつた。

その気持ちが変化していると気づいたのはいつだったか……

結崎家の老夫婦が相次いで亡くなった時。

涙を堪えながら叔父を支えようとする絵麻の姿に、どうしようもない庇護欲を掻き立てられた。思えば、その時にはすでに絵麻に惹かれていたのだろう。

気づくと、絵麻を妹ではなく、一人の女性として求めている自分が気がついた。

だが募る恋情とは裏腹に、理性がブレーキをかける。

父と絶縁状態になり、長い間国に戻っていないといっても、ルクシャーナ王国の第二

王子という生まれが消えたわけではない。

どんなにアズサが父王や王室から離れても、流れる血まででは変えられないのだ。

その場しのぎの関係なら黙っていれば済むことだが、絵麻に対しては、そんないい加減な気持ちで付き合っただけで傷つけないと思つた。

もちろん、恩師の姪に軽はずみなことはできないという気持ちも働いたが、絵麻をルクシャーナ王家に巻き込んで、母のように泣かせたくないというのが一番大きかった。

彼女には、いつでも笑っていて欲しかった。

そのためアズサは、自ら彼女への思慕を押し殺し、研究に没頭した。絵麻を傷つけることがないように、距離を置くのが最善と判断したのだ。

そんな彼女と再会したのは今から二年前。

亜熱帯性ウイルス免疫学教室の教授秘書としてアズサの前に現れた彼女は、すっかり大人の女性になっていた。

驚き、無意識に気持ちが引き寄せられ、押し殺していた感情が騒ぎだす。

しかしアズサは、心のままに彼女を愛することができないのだ。その葛藤が、結果的に絵麻への酷い態度に繋がってしまった。

(あの時、離れなければよかったのだろうか……)

国も王子という立場も関係ないと絵麻に思いを伝えていたら、こんな風にはならな

かったのか。

彼女にどう接していいのかわからず、気がつくとき突き放すような冷たい態度ばかり取っていた。

けれど、ふとした瞬間に彼女に視線がいくのを止められない。

(我ながら、勝手なことだ)

自ら彼女と距離を取っておきながら、こんなことに巻き込んで、結局傷つけることになってしまったのだから。

「おい、アズサ。聞いているのか？」

隣から、従弟にして外務官僚となった芳賀の声がして、アズサは現実へ引き戻された。

「……聞いている」

アズサは長い溜息をついて頭を振る。

絵麻が煎れてくれたお茶はとうに冷めており、他の二人の湯飲みは空になつていた。

「申し訳ありません。結崎教授」

スーツの上から膝頭をきつく握りしめ、アズサは苦い思いをやり過ぐす。

「いや……。他に方法はなかったよ。絵麻もきつとわかつてくれる」

「絵麻さんは、必ず、守ります——なので、異母兄を頼みます」

そう言って、教授に深く頭を下げた。

父王は、結崎教授を王太子の主治医としてルクシャーナ王国に送るよう命じてきたのだ。

おそらく、王太子のイムランに万が一のことがあった時、教授の身柄を盾にアズサを呼び戻せると判断したからだろう。言うなれば、アズサへの人質だ。

それでも、薬を世に出したいという強い思いが、結崎教授とアズサにある以上、他の道はなかった。

「ま、警備上の観点から言っても、対象者は一ヶ所にいてもらったほうがいい。お嬢ちゃんが引き受けてくれてよかったよ。地元の警察には、極秘で護衛を手配してもらうことになってるしな」

手を上げ、伸びをしつつ芳賀が苦笑する。

「わかっていと思うが、お嬢ちゃんに本気になるなよ。王子様。……まあ、手を出さうものなら、結崎教授から研究室を追い出されるだろうが」

「当然だ……言われるまでもない」

顔をしかめて断言する。芳賀ではなく自分自身に言い聞かせるために。

「そうだねえ、ふざけた理由で絵麻に手を出したら、君だろうが誰だろうが許さないよ。そこは親馬鹿と思ってくれてもいい」

少し太り気味の、ふくふくした頬を緩め、結崎教授がそう口にする。顔は笑っているが、目はこれ以上ないくらい真剣だ。

「わかっています——絵麻さんを、これ以上傷つけるようなことはしません」

「ま、お前は、場合によっちゃあ国王になっちゃまうもんなあ。王族の結婚はほとんどが政略だから、恋愛に慎重になるのも当然か」

絵麻の父親代わりである結崎教授の前で、いけしやあしやあと芳賀がほざく。

ルクシャーナ王国では、法律上、『養って、平等に愛していけるのであれば』複数の妻を娶ってもいいことになっている。

事実、王族や富豪は、現在も後宮を造って何人もの女性を囲っているし、中流家庭ですら二人の妻がいるのはいたって普通だ。

——しかし、アズサは違う。

「ここで妻を持つ気はない。母のような思いをさせたくないし、俺みたいな混血の子を歓迎するほど、今の王室が開かれたとは思えない」

腕を組んだまま横目で親友を睨む。芳賀はキザで悪役めいた仕草で口の端を上げた。

「芳賀くんは憎まれ役が好きだねえ」

膨らんだ腹を叩いて、結崎教授が肩をすくめる。

「絵麻の親代わりとしては、同棲しないというなら、それに越したことはないんだが」

「……必要です。公安部にいる知人から、ルクシャーナ王国のスパイがすでに入国していると情報がありました。恐らく、アズサの動向を調査するためでしょう」

一瞬で官僚の顔になった芳賀が答えるのをどこか遠くに聞きながら、アズサは目を閉じた。

「国王側が直接危害を加えてくる可能性は今のところ低いでしょう。今後、一番、お嬢ちゃん……いや、絵麻さんにとって危険な存在となるのは、アズサの後ろ盾を任命されたクッドウース太守家です」

クッドウース太守家は王室の祭事を司る由緒ある家系だ。

現在の当主は、国王の同母妹を妻としており、王家との関わりも強い。

また、娘は王太子の婚約者になると噂されていたくらいで、国内での権力も十分だ。「王太子が病に倒れた今、アズサ第二王子殿下との婚姻を成立させ、娘をアズサの第一妃にするためなら、どんな手段も取りかねない。それだけのうまみが今回の政略結婚にはあります。絵麻さんを守るためには、アズサの側にもらうのが一番です」

芳賀の言葉に、目を開いたアズサは黙ってうなずく。

ここ最近の経済発展により、諸外国からルクシャーナ王国が注目されてきているのは理解していた。

けれど、その国を誰がどう動かすかという権力争いに、自分が駒として使われるのは

面白くなかった。

国民のためならともかく、父の地位を維持するために、すべてを捨ててまでこの身を捧げる義理はない。母の死後、父王に顧みられたことなど、一度としてなかったのだから。「兄の病状は気になるが、ザムザ病の薬が使用承認されるまで、なんとしても時間を稼がなくては」

自分達の目的は、目前に迫った薬の完成と、兄の病を治すことだ。そうわかっているも、アズサの胸にはじりじりとしたものがくすぶり続けていた。



いつから降り出したのか、雨粒が窓を叩く音が古い日本家屋の台所に響く。

磨かれた茶色の床板は祖母の自慢であったため、絵麻も、土日や叔父のいない時間に気合を入れて掃除していたが、今日はそれをする気にもなれない。生前に祖母が漬けた梅干しの壺を抱えて、膝を揃えて床に座りこんでいる。

(なにをやっているんだろう、私)

仕事中は感情を押し殺し、なんとか作業をこなしていった。

週末で、経費精算処理や来週のスケジュール調整、図書館への本の返却に他部署との

事務手続きなど、ルーティンワークの仕事が多かったのも幸いした。

しかしその反動か、帰宅してから、心が壊れてしまったようになにもできなくなった。ただ、雨が窓を伝って落ちていくのを台所の床に座って眺めている。

遅く帰る叔父のために、簡単な食事を作り、冷蔵庫のストック整理など週末にやるべき作業をしなければと思うのに、どうしても身体が動かない。

その時、ふと玄関の引き戸が開く音が聞こえた。

叔父が帰る時刻にはまだ随分早い。あわてて立ち上がろうとするが、ずっと板間に座っていたため足が痺れて動くのもままならない。

床のきしむ音と共に人の気配が近づいてきて、絵麻は身体を強張らせる。次の瞬間、目を開けていられないほどのまぶしい光に照らされた。

「絵麻……。なに、してんの？」

心底呆れた女性の声に、絵麻の目から堪えていた涙が溢れ出す。

「せ、せらっちー……」

隣家に住む姉貴分で親友の高中世羅に、絵麻は情けない返事をするしかなかった。

「一風変わったルームシェアだと思えばいいんじゃない？」

高中国家からおすそ分けされたハヤシライスのスプーンで掬いながら、幼なじみであり、

同じ医学部で総務課長補佐をしている世羅が言う。

梅干しの壺を抱えて泣いた絵麻は、そこから今日あったことを洗いざらい白状させられてしまった。

物心ついた時から、絵麻は世羅に逆らえない。昔から、頼りになる姉貴分に隠し事などできたためしがないのだ。それに、世羅の口の堅さも信頼できた。

「世羅っちはそう言うけど」

絵麻は、ハヤシライスを意味もなく崩しては掻き混ぜる。世羅が綺麗によそってくれた夕食の見た目がどんどん悪くなっていった。

それに申し訳なさを感じながらも、治まらない頭の疼うずきに顔をしかめる。

大好きな高中国家のハヤシライスなのに、ちっとも味がわからないのは、今日、とんでもない未来を押し付けてきたアズサと芳賀のせいだ。

泣いて腫れぼったくなったまぶたで瞬まばたきをしながら、絵麻は大きく息を吐く。

「芳賀は学生時代から、ろくでもないことを考えつく奴だったからね。……あいつ舌だけをよく回るし」

芳賀と世羅は大学法学部時代からの腐れ縁だという。

それを言うなら、絵麻と世羅も大概に腐れ縁だ。

世羅の両親が不在の時は、絵麻の祖父母が世羅とその弟の面倒を見ていたこともあり、

家族ぐるみの付き合いが続いている。

祖父母が亡くなってからは、絵麻が高中家の晩ごはんばんごはんに招かれることが増えていた。

ついでに言えば、警察官の両親に武道を仕込まれた世羅は、柔道は黒帯くろおび、合気道は師範代という武闘派。

ある意味、絵麻にとっては、誰より近く頼りになる存在かもしれない。

「芳賀は馬鹿天才というか、天才馬鹿というか……昔からなにを考えているかわからないところがあったけど、最終的には収まるところに収まるといいうか……まあ、その辺は信用していい」

真っ直ぐな黒髪を肩の上で綺麗に切り揃え、ノンフレームの眼鏡を掛けた世羅が断言する。

「それに相手が手を出さないって宣言しているなら、貞操がーとか危機感を抱く必要もないんじゃないの」

「う、それはそうだけど。……気持ち的には微妙」

ハヤシライスをのろのろと口に運びながら答えると、世羅は食事の手を止めて水を飲む。

「そうか。絵麻っちは、アズサの奴が好きだから悩むんだろうねえ。……でも愛やら恋やらはあたしにはわからん。切ないとかトキメキとか、ピンとこない性質？ 体質？」

男も顔負けの頭脳と武術の腕前を持ち、同期どころか同年代の事務職員の中でもずばぬけて出世している世羅に、言い寄る勇氣がある男性は少ない。

世羅自身も、独身願望と言うか、お一人様思考と言うべきか、常々「男に頼って生きる意味がわからん」と言っており、思わずオトコマエ！と叫びたくなる姐さんタイプだ。結果、恋愛とは縁がなくなったらしいが——今の絵麻は「だよね」と小声で返すのが精一杯だった。

もういい加減、アズサへの思いを断ち切らなければならない時期にきているのかもしれない。

それなのに、明日にはアズサの偽婚約者となり、彼と同棲する未来が待っている。正直なところ、二人きりでどう暮らしていけばいいのか途方に暮れてしまう。

「まあ、嫌いじゃないんだしさ、相手も大人なんだから、それなりに気を配るでしょ。ま、もし、流れてセックスなんてことになったって、避妊さえしてればどうってことないわよ」さりと告げられた言葉に絵麻は目を見張った。

「……世羅っちは、経験があるの？」

「ん？ まあ、人生経験の一つとしてやってはみたけど」

「え、彼氏とかいたっけ？」

「いないよ。飲み会のあと、芳賀と。一回だけ」

ハヤシライスを嘔き出しそうになった絵麻は、あわてて水を飲み込んだ挙げ句に咳き込んだ。

「芳賀さん、って……外務省、の」

「そう。……いつだったかなあ。サークルの飲み会でシモネタが爆発してさ」

「いや、知らないから」

シモネタぐらいでは、天下の高中世羅が恥じらうことはないだろうけど。

「芳賀が、セックスなんてスポーツみたいなものとか言いだして。……つい、あのアホの挑発に乗って、じゃあ手合わせするかと……」

ラブホで、と締められた話に絵麻は目眩めまいがしてくる。

我が道を行く世羅らしい色気もない展開に、どこからどう突っ込めばいいかわからない。

「えーと、い、痛かったですか？」

頭の中が混乱しすぎて、定番すぎる質問をした絵麻に、世羅はひょいっと肩を上げた。「んー。痛かったと言えば痛かった気もするけど、生理的な反応があるからそこまで酷ひどくなかったかな。結構、汗かいて腰にクるもんだわーと思っただけ。だからといって、芳賀と恋愛的にどーこーなることはなかったけど」

それは世羅だからではないのかと、失礼にも思ってしまった。

自分だったら――

自分だったらきつと落ち着いてなどいられないだろう。アズサとキスすると想像しただけでも、鼓動が速くなりそうなのに、それ以上など考えられるはずもない。

セックスがわからないと可愛い子ぶるつもりはないし、それなりに知識もある。

今はその手の情報はマンガやネットでいくらでも手に入るし、愛や恋がなくても身体を重ねることは珍しくない時代だ。

これまで男性に縁がなかった絵麻からすれば、一夜限りのセックスなどとてもないことだが、二人の関係は、ザムザウイルスに感染して、苦しんでいる人を助けるためのもの。婚約も結婚も、ただ便宜上必要というものでしかないのだ。

わかっているのに、心のどこかで期待してしまふ自分がいる。結局のところ絵麻は、いまだにアズサに惹かれているのだ。あんなに酷い提案をされたにもかかわらず。

いつの間に雨がやんだのか、雪のように一片ずつ舞い散る庭の桜をぼんやりと眺めながら、絵麻は溜息をつく。

すると、世羅が真つ直ぐに絵麻の顔を見つめて、真剣な声で言ってきた。

「芳賀は電話で締め上げておくとして、なにかあったらあたしに言つて。絵麻を泣かせたら、芳賀だろうがハリ―ファ准教授だろうが、ヒールで股間踏み潰してやるから」

心強いものの、それだけはやめつて言うべきか迷つていると、世羅の携帯が鳴り、聞

き覚えのある声が微妙かすかに聞こえた。――隣家の主婦である世羅の母がなにか用事を言いつけてきたらしい。

「ごめん。弟を迎えに行けつて。もうビール飲んじやつたらしいよ、うちの両親。……

そうだ、今度、前に言つてたメキシコ料理屋に行こうか？」

「うん、楽しみにしてる」

昔から面倒見がよくて、さりげなく絵麻をサポートしてくれる世羅に感謝しつつ、彼女を玄関まで見送つた。そして、急に静かになつた家で絵麻は力なく笑う。

(本当に、どうしたらいいのか……)

明日には、もう、この家にはいないというのに、まるで実感が湧かない。

途方に暮れる自分を叱り飛ばし、絵麻は同棲に向けて荷物を準備し始めた。

(とりあえずの品なら……普段着と、通勤着をいくらかと、化粧品くらい?)

考えながら、クローゼットの引き出しから子ぐま模様のパジャマを出し、続いて、ミニチュエストから下着を出そうとして手が止まる。

自分の下着のあまりの女子力のなさに脱力してしまつた。

あー、とも、うー、ともつかない声を出し、絵麻は同棲から連想される単語を頭から追い出そうと必死になる。

(偽の婚約者だから！ ないから！ そういう関係にならない前提での同棲だからっ！)

「自意識過剰だよ……」

ラグの上で正座したままうつむく。気にするほうが馬鹿げている。アズサは絵麻のことなんで、なんとも思っていないのだから。

逃げ出したいのを我慢して、絵麻は淡々と服や必需品を段ボールに詰めていった。

最後の段ボールにガムテープを貼った頃にはもう深夜で、絵麻はシャワーを浴びるが早いかな、布団に潜り込んだ。

けれど緊張でなかなか眠ることができない。

ようやくとうとうと始めたのは明け方近く。そのため、すっかり寝過ごしてしまった絵麻は、玄関のチャイムの音で起こされたのだった。

スマートフォンのアラームにしては、いつもと音が違うな……と思った。

何度かその音を聞くうちに、それが家のインターフォンの音だと気づいて飛び起きる。『朝、迎えが行くから荷物をまとめておくように』と、昨日アズサからメールで指示されていたのを思い出し、一気に青くなった。

あわててパジャマを脱ぎ捨てる間にも、玄関ではインターフォンが連打され、絵麻は焦って桜色をしたシャツのボタンを二度掛け間違えてしまふ。

昨夜用意しておいた、デニムのスキニーパンツとパステルグリーンのカーディガンを

身につけ、急いで洗面所のある一階に下りた。

するとインターフォンを鳴らすのに飽きたのか、家の引き戸がガタガタ動かされている。

(やばい！ ノーメイク！ 寝癖！)

焦って混乱する中、呑気そうな低い男の声が聞こえてきた。芳賀だ。

「あれー。先に行っちゃったかな。まさかの留守？ それとも、逃亡したか？」

なおも激しくガタガタと動かされ、このままでは玄関の引き戸が外されかねない。絵麻は半分パニックに陥りながら叫んだ。

「もうすぐ！ あと五分したら開けますからっ！ 壊さないでー！」

声が聞こえたのか、芳賀が気楽な様子で返事をする。

「ああ、お嬢ちゃん。ちゃんと逃げずにいたか。……エライエライ」

「……芳賀」

アズサだけでなく芳賀までいるのに驚きつつ、洗面所で顔を洗い手早く髪を整える。

いつもはバレッタできちんとまとめたり、お団子にしたりするのだが、今は時間がないので、普段使いのシユシユで一つに束ねた。

少しだけ撥ねた前髪をヘアピンで留めたあと、化粧を始める。といっても、ベースとパウダー、珊瑚色のウォータリールーージュを唇に塗るだけの、簡単ナチュラルメイクだが。

半分スリッパが抜けそうになりながら、足早に玄関へ行き引き戸の鍵を外すと、芳賀とアズサがいた。

Vネックのホワイトトップスに黒のジーンズという普段着姿のアズサを見て、絵麻は一瞬、呼吸を忘れてしまう。

モノトーンを基調としたコーデイネットが、彼の金髪と琥珀色の肌にとっても似合っていた。

大学にいる時は、シャツとネクタイの上に白衣というスタイルの彼だが、今日は目の色と同じラピスラズリが嵌まったシンプルなクロム・ネックレスをつけている。

アンティーク風の腕時計もおしゃれで……つまり、とても格好よかった。

(こんな私服を着るんだ……)

プライベートなアズサの姿にドキドキして、つい、見惚れてしまう。

これから偽の婚約者として同棲するのだから、私服を目にするのは当たり前だ。

それでも大学以外の場所でアズサと会うのは照れくさく、絵麻の頬は勝手に上気した。「お嬢ちゃん、アズサだけじゃなくて俺も見ろ……いてっ」

スーツからジャケットとネクタイを外した格好の芳賀が、なぜかアズサにスネを蹴られていた。

「無駄口を叩くな。すぐ荷物を車に運べ。……俺は、引越しが終わり次第、研究室に

戻りたいと伝えたはずだ。忘れたのか、芳賀」

「覚えてるよ」

叔父の武彦は、土曜日の今日も大学に出勤している。昨夜、叔父は「絵麻が出て行くのを見送るのは、なんだか娘を嫁にやる父親みたいで泣いちゃいそうだから」と話していたので、早々に仕事に行ってしまったらしい。

「こんなところではなんですので、ひとまず中でお茶でも……」

引き戸を大きく開けて、ダイニングのほうを手で指した時だった。

無表情のアズサが顔をしかめ、長い溜息をついた。

「必要ない」

きっぱりと言われ、絵麻の笑顔が凍りつく。

服装が変わっても、アズサの対応は研究室にいる時とまるで同じで、極力絵麻と関わらたくないという態度がありありと出ている。

「まあまあ、女には細々とした準備があるんじゃない？」

アズサのあまりの塩対応に、さすがの芳賀も若干困ったような顔を見せる。

「とりあえず、今、必要なものだけでいいと伝えてあった上、一晩も時間があったのに、準備を終えていないのか？」

まるで不出来な院生を叱る時みたいな口調に、絵麻は頭を横に振った。

結婚を前提とした婚約者同士の同棲といっても、それ自体が偽りのため、いつ終了するかわからない。

だから、必要最低限の服と好きな本がいくらか。それと、仕事用のスーツやバッグを段ボールに詰め、玄関横の和室に積んでいた。

家具は備え付けのものがあると芳賀から聞いていたので、業者に頼んで運んでもらう必要もない。

今、必要なものだけでいいのは、きつとそう遠くない未来、ここに戻ってくるから。

——これは、ちよつと変わったルームシェア。

そう自分に言い聞かせて、絵麻は真っ直ぐアズサを見る。

「準備は、終わっています」

長いのか短いかわからない沈黙のあとでそう告げると、アズサは絵麻からつと視線を逸らした。

「わかった。さつさと済ませよう」

そつげなく言われて、唇を噛む。

（そうだよ。ハリーファ准教授にとつて、これは日本に残るために仕方なくやることだもの）

惹かれている相手に拒絶されながら、婚約者として生活する毎日を思い、胸が切なく

痛んだ。それをぐつと堪えて、絵麻はアズサに背を向け、荷物を運び出す用意を始めた。

芳賀がレンタルしてきたワンボックスワゴンに、四個の段ボールを積み終え、絵麻は最後に奥の和室で仏壇に手を合わせる。

（行つてきます。おじいちゃん、おばあちゃん。……お父さん、お母さん）

叔父も、月曜日にはルクシャーナ王国に旅立ち、しばらく戻つてこないと聞いた。アズサの帰国を引き延ばすため、ルクシャーナ王国王子の主治医になるらしい。

（一人に、なるんだな）

思わず目の縁に浮かんだ涙を指で拭い、空元気（から）の笑顔を作った。

大丈夫、自分で決めたことだ。前向きに気持ちを切り替えて、外に出て玄関の戸に鍵をかける。

その鍵をぎゅつと手の内に握りしめ、シヨルダーバッグの奥にしまった。

「お待たせしました」

できるだけ明るく笑いながら、芳賀と、その隣で腕を組んで黙りこくっているアズサに声を掛ける。

一瞬、アズサの瑠璃色（るり）の瞳が大きくなり、そのまま見つめられた。

「あの、なにか？」

立ち読みサンプル はここまで